
紅の伝説

龍水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅の伝説

【Nコード】

N 6 4 1 2 F

【作者名】

龍水

【あらすじ】

異世界に飛ばされた個性豊かな中学生4人が異世界フィオーレでユメリア王妃を探す旅に出る。コメディです。

第1話

「狼と山風」

「たっ大変よ!」

休み時間の教室に一人の少女が駆け込んできた。私は何事かと思
い振り向くとその少女はクラスメイトの西山さんだった。私が仲良
くしている一人だ。

「どうしたの西山さん?」

いつも冷静な西山さんがここまで慌てているのは珍しかった。

まだ息も乱れているのにも関わらず言った。

「2組の神野 天歌さんが、リンチにあってるのよ& a m p ; # 8
252;」

その一言でクラス中がざわめいた。

それもそのはず、このどかな町でリンチなんて聞いたことなど
ただの一度も無い。

「リンチって誰に?」

私は驚いて聞くと彼女はさらに驚くべきことを言った。

「他のクラスの人達は『狼』って呼んでた。」

クラスに居る男子は絶句してた。だが、そんなことにはかまっ
られない。もしそのことが本当なら一大事だ。

私はすぐに席を立てて走り出した。

「香山さん!どこいくの!」

西山さんが私に向って慌てて言った。

「リンチやってる場所は?」

返事になっっているようななっていないような返答を私は教室の
入り口で振り向いて聞いた。

「たっ体育館の前」

それを聞き終わる前に私はまた走りだしていた。

早く行かないと神野さんが危ない！でも、まさか……狼が来るなんて……信じられない。

私はそんなことを考えていると体育館の前に着いた。その時丁度狼が神野さんに殴りかかるうとしていた。

私はその人達を押しつけて狼の手を受け止めた。

「山風！！」

私を見た狼は目を見開いて言った。私が受け止めた……いいや、私がここにいることに驚いているようだった。私は苦笑して言った。「相変わらずね。りゅ……って本名言っちゃダメか、でも女の子に手出すなんて……」。

私の口わは笑っていたが目は笑っていなかった。

「ああそうだな、でも、ここまでしねえとこいつの親も頑固でさ」
狼は肩を落として言ったのに対して私は狼の真意を見抜こうとしていた。

「それでも、学校はまずいと思うわよ」

「それもそうなんだけどさ、ってか山風おめえ晴久中に行くんじゃないのか？」

狼は不思議そうに聞いてきた。私は神野さんを助け起こしながら呆れた口調で言った。

「千里にも綾にも言ったはずだけど？こっちに引越すってこと」

「あいつらがどれだけ中悪いかぐらいわかるだろう」

笑が含まれた声で言った。

「まあ、それもそうね」

次の瞬間、狼の一撃が入った。私は間一髪でその攻撃を交わした。それから立て続けに繰り出される狼の攻撃を避けていたが一瞬油断したその隙を狙って追い打ちをかけられたが、狼の足を思いつきり踏んづけてから瞬時に狼の膝裏に足を回して倒れたところに私は左手を狼の首のところにつけた。

「何で手加減したの？」

私は不思議に思っただけで狼に聞いた。「なんとなく、てかおめえ動き

鈍くなったな。」

「そりゃあ、この4年間位ろくに運動してなかったからね。」

回りにいる人たちは驚いた。4年間もの間ろくに運動していないのに先の凄い動きができるなんて冗談だろ？という表情をしていた。実際に口に出して言っていた人達もいた。

「日食でも起きるんじゃないの？」

狼はあきれた顔で言った。

「3回起きてるよ。そのうちの1回は半日日食だけだね。」

私がそういうと狼は黙ってしまった。本当のことだったためいいかえせなかったのだ。

「でもよ、香山 明風。いくらなんでもここまで鈍らねえだろ。」

「……」

「それになあ、演じるのやめろよ。」

「ふっ、よくわかったわねえ、本当に演じなくていいの？」

「ああ。」

「でもなあ。」

私が少し渋ると狼は苛立ったように言った。

「じゃあもういい、好きにしろ！」

私は微笑んでから言った。

「好きにさせていただきます。」

「……最初からそのつもりだったのか？」

「まあね。」

当たり前でしょって感じで言った。

そこへ、控え目に狼の部下らしき人が聞いてきた。

「お取り込み中すみませんが、貴方は誰ですか？」

「誰って聞かれても……。」

私は困って狼に眼くばしした。

「そうだなあ、喧嘩友達とも言えるし、恩人とも言えるし？」

周りにいた人達は喧嘩友達と聞いて驚いたが恩人と聞いたときには流石に動揺をかくせないようだった。

狼はそんなことには構わずに続けた。

「名前の方で言う香山 明風。俺の喧嘩友達であり恩人である。」
喧嘩友達であると聞いてみんな驚いたが、恩人だといったときの
比ではなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6412f/>

紅の伝説

2010年12月26日02時36分発行